

同胞

桑港より 露 子

聞きてだに身の毛もよだつ桑港の大地震、幾多の人命を損ひ巨億の財を灰燼に歸したる其中に、身は是れ數千里外なる異域の人、學びの旅路に憂き月日を送る身の、さしもの大厄に遇ひて、毫も心亂れず、坦々として平地を行くが如き其心根、惡き程に穩なることよ(記者附記)

母の遺産三千弗、金もたぬ人の眼からは羨ましからんもはらからとも父の面影を知らぬほど不幸なる孤女、父よ母よとすがるべき暖かき手をもてる人嫉ましく、あはれ金もほしからず、衣裳も寶石も何かせん、よしや破れたる裳をかゝげ、古びたる帽子いたゝきても、父あり母ある身となりたやと、姉妹相擁して泣きたること幾度か。

姉さん、あなたは四つの時だと云ふではありませぬか、せめて父君の御言葉の二ツや三ツの、御心にとまつて居るのをさかして頂戴なとラアにす

がられて、姉のカザリンは、それだつても、あれかこれかと思ふのは夢のやうに心の底に残つて居れど、よく思ふとみな母君の御言葉のやうで、これが父君のと云ふては、消えた石盤の文字を尋ねるやうだつ、ほんにわたしどもは不運だネー、この御寫眞のあるのを、せめてもの慰めとしませうヤ、母君の世にいませし折は、愛の泉の汲めども盡きず、旅にある父君を噂するやうな心地、かくまで父の戀しき想なかりしを、母なきあとのこの五とせ、母にもまして戀しきは父君なりける、吾は十八、妹は十四、浮世のありさま、春霞たちこめしバナラマのやうにでも、見える齡となりしためか、奇しき吾等の心なる、悲しきは吾等につらき命運の風なるよと姉は心の底に、亂る糸を解きつ、繰りつ。

ラアよ、いつも云ふ通り吾等の學藝は吾等の父君でまた母君なのですよ、悲觀すると勇氣が挫けます、今日の佛蘭西語はどうでした、サアおさらひしませう、そのあとで、御身の好むヂッケンスの輪讀をはじめませう、オヤいやな瓦斯だネーその次のにもライトしなさいよ、よろしひサア御讀み廿六章から三十章まで、今日は非常の進歩でしたよラテン文二ツでお茶をにこして來た姉さんが御恥かしいよ。

かくて定め時刻まで文机を共にし、同じベッドによりそひて、現なる姿にもまさりし清き想は夢路をさすらひて、いかなることかものがりけん、眼を破られて二人ともベットよりころがり落ち、かたみに蒼き顔を見つめ、地震よといふも口のうち、いかにして階段をくだりしか、いかにし

て戸を排したるか、覺えず見かへれば前庭の芝生の上に相抱きて倒れ居たりけり。

ラアよ、吾等はこのまゝ死すべきにあらず、父もいまさじ母もなしとて、學藝は吾等の父母なるものを。サア元氣をつけて、逃げませう。いつの間にか靴も穿ち居たり。財寶も提げ居たり。ラアよサア逃げませう、アレ姉さんと云ふうちに崩れ落ちる音すざまじく、泣きさけぶ聲かなたこなた、ころげつまるびつして逃れゆく後ろよりバツト炎えいだすは誰が家よりの火事か、耳なり眼くらめきて、人の走るまゝ意味もなく方角もなく走せゆきぬ。地震はいつの間にかやみたれど、執ねき火はいづこまでや焼かんとすらん、黒煙白煙空に漲りて東に西に馳せゆく人、戰の庭の砲丸にも似て、ふれなばそのまゝ斃されん、ラアよ、

カザリンよと枯れさびたる聲ふりしぼりてかたみに手をひき合ひ、金門公園の木かげに倒れたるのち、はらからともにしぼし人心地なかりし。

水道の管破裂したれば、ダイナマイトにて鎮火を企つることか、海戦陸戦交々闌はなるに似たる響、われにかへりし二人は、云ひ合せし如く顔見合せて、吾等は死せざりしよと心のうちにつぶやきぬ公園に逃れ来る馬車殆んと絶ゆる間もなく、落城のありさまもかくやと思はる。

自助獨立の國ぶりに養はれし身、ましてやすがるべき父もなし母もなき孤女の、かくてやはとの心むらむらと起りぬ。財囊を開きて紙幣と銀行券とをハンカチーフについみ、カザリンこれを肌につけ、のこれる黄金白金を妹のポケットに納め、それにしてもかゝる寝巻すがたにて逃れ來りして

と口惜しや、ララアよ、どうせうネ。姉さん御心配なさいますな。たしかこの近きに衣裳店がある筈、いつか散歩の時見たやうに思ひます、地震も今に治まりて、火事はこゝまではあんなに離れて居ること、わたし、ゆつて見ませう、わたしはまだ子ども、ことにこの折のことですから何の恥かきしことがありませうと姉のうなづくをまたでかけだしたり。

神は吾等に死を與へ玉ふとも、吾等に恥をば與へ玉ふまじ、妹の望みまどかなれやと木蔭をいで、うち仰げば、黒煙すさまじき中に日は高くのぼりて、まだ覺めやらぬ夢心にも、吹く風身にしみて、心細さ一としはなり。父もなく母もなき孤女二人、公園に飢死せりと云はるゝは口惜しきことの限りなるかな。衣裳を手に入れしのは、この砂の上

に新家庭をしつらへん。太平洋に海嘯起りて、市中を波の下となし終らばしらぬこと、宿る家のなればとて、空しく死なるべきか。形なき學藝の戦場にまで、姉妹唯二人にて打つて出でんと思ふものを、形骸の始末何のむつかしきことやある。うれしや妹はかへりたり。

姉さん、丁度よかつたのよ、とりみだして手のつけようがない店のうち、ふと眼につきしは學生服、そのまゝ買ひとりて参りました、これは私のです御氣の毒な、姉さんのは一寸とうつりが悪いやうだ、私のはまことに氣に入つてよ、帽子もありませよ、サア人の來ぬ間に着かへませう、つゝんできたこの毛布を風よけとして、わたしもつてゐませう、サア早く早くと促がしたり。自ら助けよとて天の興へ玉ひし力、ためすはこの

時と夕ぐれまでに可愛ゆき靴のゆき、せはしく、何に傷つけしか織手に縋帯までして、形ばかりの避難處漸くつくりあげたり。テント一重なれど砂を吹く風を防ぐに足るべく、石をたたみたるスト一ブも枯枝を拾ひ集めてはコークするに何の難きことかあらん。わが専就りぬとうちを姉、ア、くたびれたと亂れがみかさあぐる妹、野の花を見ずやとのバイブルの匂も思ひいだされて、今更ならぬ神の御めぐみに感められぬ。森のかげ、木の下には同じく難をさけたる人々群りて、テントの新市街は時と共に榮えゆくこそうたてけれ。心安しやと遠くながめたるほとりまで火炎の舌になぶられて、幾千日にもあれ、焚き得るものゝあらん限りは焚きつくさんと云ひたげなるすぎましさ、日の沈むとも紅くなりゆく

惡魔の面影憎しとや云はん、畏ろしとや云はん。夜もすがら火をながめ、爆裂の音をきゝて眠られ

ず、されど戦はじまりてすでに血を見たる人の如く、こしかたもゆく末も思はず、心畏ろしきが中にも一種の覺悟ゆるぎなく、さもあらばあれよとうちゑみたき心地するも奇なり。ゆきゝの人のかたるをきくに、この天災の穢となりて、あるは碎かれあるは焚かれて斃れたる人、殆んど數千人、幾千萬弗の市の光彩の、箒の先に拂はるゝ蜘蛛の巢の如く、今はあとかたもなく蹴ちらされ、これよりのちいつまで焼かんとするらんなど、はかなしと云ふよりは寧ろ天災といふものゝ力の偉大なるに畏敬する心も起るなり。

震動は未だやまず、されどなれたるにはあらねど覺悟の上ははじめの如く驚かず、動かすがまゝ、

に動かされて、船室の窓より怒濤をながむるにも似たりけり。

あくる朝、ものとのへんとしてゆきし妹のいふに、ブレードを求むる人々ベーカーの店を起點として、五十人あまり長き線をつくり居たりとか、所謂ブレードラインと云ふもの、かゝる折ならではいかで見らるべき、このあたりは平和のちまたと云ふべきものなれば、人の世の禮讓と云ふものまだ残り居れど、下街のあたり、白晝ピストルをさしつけて、食物を掠すむるもありとか、淺ましとも淺ましきことにこそ。

火は三日にして漸く消え、四五日後にして警察の取締りもとの如くなり、兵士の警衛も加はり、新聞も發行せられ、電車もある部分は通ずるやうになりぬ。されど折々の震動未だやまぬために、い

づこの家にも未だテントを撤するにいたらず、
皿鉢などのみ破られし家にも、臆病神の威光を
はかりて、いづれも家のうしろに假屋をしつら
ひ、破られぬ煙筒ありながら、砂の上のストーブ
の煙りにむせび居るこそわりなしや。

ラアよ新聞の口調ならねど、桑港は再び起
るべし、前途には光明輝けり、吾等は死なれま
せぬ吾等は學びませうと、毛布に身をつゝみなが
ら、學課の問のいろいろを試むるはカザリン、二
週間の野營にて忘れがたきあるものを學ぶ、流石
にすてがたき想ある新家庭を解きて、再びルー
ムの中に起臥することゝなりたりけり。口癖のやう
に云ふなる、學藝は吾等の父母なりとて、かたみ
にはげましていそしみ居ることなるべし。さるに
てもこの二週間に、心の底に刻まれたるなみなら

ぬ想のいろいろ、いつの日いかなる時か、カザリ
ンの筆の花に一點の紅を添ゆるとならずや。
ラアのピアノの音に余韻を現はすことのなから
ずや。浮世の風は徒らに吹かず、神の興へし運命
は、順逆二た色の木材のみ、自助獨立の鑿はそ
の愛子なる吾等の手にあるものを、刻むべきを刻
まず、彫るべきを彫らずして、いかでかわたら生
涯を朽木となしはつべき。この命のあらん限り、
勉むることを勉むる外に、道と云ふ道もあらじと
ぞ思ふ。

(終)

▲盆栽と外人 近來俄かに外國人の本邦盆栽を賞玩する
もの多くなり目下横濱盆栽株式會社の手に依つて海外へ
輸出されるものばかりでも一ヶ年四百萬圓に上る由、猶
彼等が最も嗜好するは百合、殊に鐵砲百合を以て第一だ
さうです